

釈論大江千里集（三）

小	半
池	沢
博	幹
明	一

〔前説〕

本稿は、「釈論大江千里集（一）・同（二）」（『長野工業高等専門学校紀要』五一号、二〇一七年六月・同五二号、二〇一八年六月）の続稿である。

古今集以前に成立したと見られる『大江千里集』（別名『句題和歌』）は、大江千里一人によって詠まれ編まれた、漢詩一句を歌題としたという点で、日本最初の和歌集である。この歌集は句題という形式をとる試み自体としては、文学史的な評価が認められているものの、歌そのものは句題を直訳しただけの、生硬稚拙なものという低い評価がされてきた。

本稿は、そのような画一的な評価を疑問とし、改めて句題と和歌との関係や和歌の表現史的位置づけを、一組ずつ検討することを通して、正当な評価を行うために、新たな注釈を施すものである。

「正当」ということばの意味は二つある。一つは、まずは句題と切り離し歌単独として見たとき、当時の評価基準に照らして、どのような出来かを明らかにすべきであるという意味であり、もう一つは、その上で句題あつての歌であるから、両者の関係の如何を見極めることが、当集の趣旨を考えるうえで、もつとも重要なことであるという意味である。

なお、本注釈の目的と意義の詳細、および注釈の凡例や作業分担などは、旧稿の「釈論大江千里集（一）」を参照されたい。

〔本編〕

晩帰多是省花廻（せむ晩く帰るは多くは是れ花を看て廻ればなり）

六 いまははやかへりきなましみちなりしはなをみしまにほどぞへにける

【通釈】

もつと早く（家に）帰って来れば良かったなあ。道端にあった花を見ていた間に（気付いたら随分と）時間が経ってしまったことだよ。

【語釈】

いまははや 「はや」は、早く、急いでの意の形容詞語幹用法。「いまははや」という表現は初句に置かれることがほとんどである。当歌は、「いまははや」が第二句「かへりきなまし」に係り、二句切れとなる。このように、「いまははや」が推量や希望・あつらえ・命令などのモーダルな表現をとる第二句に係り、句切れとなる歌は、平安時代以降の類型であり、「今ははやこひしなましを／あひ見むとたのめし事ぞいのちなりける」（古今集・十二・恋二・六一三・清原深養父）、「いまははやかれはてなまし／くさのねのかはらでつひにはるをまつかな」（躬恒集・三六四）、「いまははやさきにははなん／さくらばなも草ぐきかくろへにけり」（六条修理大夫集・一五一）、「今ははやあまのと渡れ／月のふねまたむら雲に鳥がくれせで」（林葉和歌集・四五九）などの類例がある。

かへりきなまし 助動詞「まし」はいわゆる反実仮想の表現に用いられ、実現不可能の希望を表す。上接の「な」は助動詞「ぬ」の未然形で、「まし」の意を強める。「見る人もなき山ざとのさくら花ほかのちりなむのちぞさかまし」（古今集・一・春上・六八・伊勢）の「まし」も、桜の咲く時期に関して実現不可能な希望を表す。当歌の場合、すでに帰るのが遅くなっている現実の事態に対して、もつと早く帰ればよかったという不可能な希望を述べている。不可能な希望というのは、後悔の念に近い。『全釈』の【語釈】には、「今はいつそのこと、帰って来てしまえばよかった」とあるが、「いつそのこと」の意味が不明である。なお、千里集で「まし」が使われる

のは当歌だけである。

みちなりし この助動詞「なり」は「に+あり」の意で、存在する場所を表す。すなわち道にあるの意。この句が連体修飾する次句の「はな」との関係から言えば、道の中ではなく、道沿いあるいは道端のことであろう。

「はなをみしまに」「はな」がどの植物なのかは、春の花である以外には特定しえない。ただ、二番歌からの配列を見るかぎりでは、また庭ではなく「みち」であるところからは、梅花ではなく桜花の可能性が高そうである。『全釈』の【訳】では「あちこちの花」として、さまざまな花を想定しているようであるが、当該表現は一箇所・一本という解釈も排除するものではない。前の句に続けて過去の助動詞「き」の連体形が使われているが、古今集を検索すると、一首に「き」が複数回使用されるのは、「うゑし時花まちどほにありしきくうつろふ秋にあはむとや見し」(古今集・五・秋下・二七一・大江千里)、「秋ののにささわけしあさの袖よりもあはでこしよぞひちまさりける」(古今集・十三・恋三・六二二・在原業平)、「ふるさとは見しごとあらずをのえのくちし所ぞこひしかりける」(古今集・十八・雑下・九九一・紀友則)の三首がある。この中にも千里の詠歌があり、一首に三回も使用される。また、当集には「ゆくかりのとぶ事はやくみえしよりあきはかぎりとおもひなりにき」(五三三)もある。このように「き」が一首内に複数用いられる場合は、同じく過去であっても、その順序性を示す。当歌で言えば、当然ながら、花が道端にあることが先行し、その後になんかを見たということである。

ほどぞへにける 前句の「ま」と「ほど」は、経過する時間のことをいう点では共通するが、原義が空間的か時間的かで異なる。また、当歌では、「ま」は「みちなりしはなをみし」という連体修飾句を受け、次句を連用修飾するのに対して、「ほど」は修飾句を伴わない単独の主語用法であり、花を見ていた時間を含め、出発から到着までの時間のことを表し、歌末の「ける」により、無自覚のうちに時間が経過していたことに気づいた詠嘆を表す。この句は一種の類型表現で、ほとんどの用例が当歌のように結句にあり、直前には句切がない。また、七音句として検索される鎌倉時代までの全ての用例で、「あは雪のふるにきえぬべくおもへどもあふよしもなみほどぞへにける」(人丸集・一六五)、「うれしといふことはなべてになりぬればいはでおもふにほどぞへにける」(後拾遺集・十七・雑三・九九九・周防内侍)などのように、「ほど」に修飾句を伴わず、ある状態のまま時間が経過することを表す。

【補注】

当歌のような「花」と「道」の組み合わせは、三代集、特に古今集では「散る」とともに詠まれて、「春ののにわかなつまむとこしものをちりかふ花にみちはまどひぬ」（古今集・二・春下・一一六・紀貫之）、「しひて行く人をとどめむ桜花いづれを道と迷ふまでちれ」（古今集・八・離別・四〇三）など、落花が散り敷いたために道に迷うことが詠まれる。それに対して、花を見ていたために道を行くのが遅くなるという歌も、古今集前後では、「玉銜の道は猶まだ遠けれど桜をみればながるしぬべし」（貫之集・九二）、「花ちれるみちのまにまにとめくれば山には春も残らざりけり」（古今六帖・一・はじめのなつ・七〇・清原深養父）、「秋のはみちもゆかれずともすれば花のあたりをめのみとまりて」（古今六帖・二・のべ・一二二六）など見られる。

当歌の成立状況を考えれば、上二句の「いまははやかへりきなまし」という後悔に近い思いは、「みちなりしはなをみしまにほどぞへにける」という気付きから導き出されるものであるから、二句切れではあるが、両者は倒置的な関係にあると言える。

なお、赤人集には「いまははやかへりきなましふぢのはなみるとせしまにとしぞへにける」（二四）という歌がある。当歌と比べると、全体の表現構成は類似するものの、第三句以降、「ふぢのはな」や「とし」など、語の違いが著しい。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の七言絶句「早出晚帰」詩（卷五十八・二八一四）であり、句題に採られたのはその承句である。

早起或因攜酒出（つと）早起くるは或いは酒を攜へて出づるに因り、

晚帰多是看花廻（おそ）晩く帰るは多くは是れ花を看て廻ればなり。

若抛風景長閑坐（も）若し風景を抛ちて長閑として坐せば、

自問東京作底来（自ら問はん、東京作底でか来ると。）

原拠詩の前半は、朝早くから夕方まで洛陽の春の風景を満喫する様子を歌ったものであり、承句には、当歌における「いまははやかへりきなまし」という思いも、「ほどぞへにける」という、今さらの気付きもまったく認められない。つまり当歌は、原拠詩承句の示す事実そのままを取り入れたうえで、その事実よりも捉え方のほうを前景化させたのである。

「いまははやかへりきなまし」という表現の表す、実現不可能の希望は、不可能であるがゆえに後悔の念と結び付きやすい。しかし、

その後悔とは、帰宅後の予定がこなせなくなったというような不都合な事態が生じたからではあるまい。常軌を逸するほどに、花に見とれてしまったことに対する、やや自戒めいた思いであろう。それは、帰る途中でたまたま「みちなりしはな」に目を止めてしまったことによる。つまり、原拗詩のように、最初から酒を携えて花見に出掛けたのとは訳が違うのである。この点では、当集二番歌の「うぐひすのなきつる声にさそはれて花のもとにぞ我はきにける」の歌境と通じるものがある。

もちろん、花見のつもりで目指す場所に出掛け、予想を上回る花の見事さに、予定以上の時間を費やしてしまったという解釈もありえよう。しかし、それならば、原拗詩承句にはない「みちなりし」という、普通「はな」を修飾するには用いない表現をあえて附加する必要はなかった。

当歌結句の「ほどぞへにける」という表現は、原拗詩前半の「早起」と「晚帰」から想定される時間幅から導き出されたのであろうが、原拗詩のほうにその時間幅に対する驚異感は見出ししようもない。「ほどぞへにける」が結句の類型表現であったとしても、一首の焦点であり、それが花を見ることに起因したことに對する感慨が主旨であることは動かない。その意味では、**【補注】**において、上二句とそれ以下は倒置的な関係にあると述べたが、上二句は、原拗詩承句の「晚帰」という事実を心理面から捉えて、結句の内容をあらかじめ言い換えた表現と見ることもできよう。

なお、原拗詩承句の「多」字と「是」字に對應する表現が、当歌には見当たらない。前者は、花のみに特化するため、後者は漢文的言い回しを避けるためと考えられる。

緑糸條弱不勝鶯（緑糸、條弱くして鶯に勝たへず）

七 こづたひてみどりの糸のよわければうぐひすとづるちからだになし

【通釈】

(鶯が) 他の木へ移ろうとするのに、(柳は) 緑の糸(のような枝葉) が弱いので、鶯を綴じ入れ(留め) る力さええない。

【語釈】

こづたひて「こづたふ」は、木から木へ、あるいは枝から枝へ移る、の意。「袖垂れていざ我が園にうぐひすの木伝ひ散らす(木伝令散) 梅の花見に」(万葉集・十九・四二七七・藤原永手)、「こづたへはおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ」(古今集・二・春下・一〇九・素性) などのように、「こづたふ」の主体は鶯であり、鶯が移動する影響によって花が散ると詠まれるのが類型である。散る花は、前者では梅、後者では桜であろう。当歌においても、下句の「うぐひすとづるちからだになし」との関係から、主体が鶯と特定でき、「こづたふ」木は柳であるのが明らかである。鶯との取り合わせという点では、梅が一般的であるが、万葉集には「うちなびく春立ちぬらし我が門の柳の末にうぐひす鳴きつ」(万葉集・十・一八一九)、「春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちてうぐひす鳴くも」(万葉集・十・一八二二)、「朝な朝な我が見る柳うぐひすの来居て鳴くべき森にはやなれ」(万葉集・十・一八五〇) などのように、柳と取り合わせた例も見られる。なお、当句は「て」という接続助詞によって第二句以降に続くが、文脈的にはつながりが良くない。この点については、【補注】を参照。

みどりの糸の「みどりの糸」は、柳の芽吹いた枝葉をいう。用例は少なく、三代集時代まででは、「あをやぎの緑の糸をくり返しにくらばかりのはるをへぬらん」(拾遺集・五・賀・二七八・清原元輔)、「わがやどのやなぎのいとはるくればみどりのいとなりになるかな」(忠見集・八三)、「なにしおはあけのころもはときぬはでみどりのいとをよれるあをやぎ」(宇津保物語・四九五) が見られる程度である。その中では当歌は早い用例であり、句題にある「緑糸」という漢語をそのまま訓読したものだろう。当歌には「あをやぎ」あるいは「やなぎ」という植物名は出てこないが、「みどりの糸」という比喩だけでも、柳の細長い葉を表すことは、句題の原拠詩によるまでもなく、すでに自明だったと考えられる。

よわければ この句、底本文は「よりければ」であり、この「より」は「糸」との関係からは「繕り」としか考えられない。しかし、それでは下句の内容にどうしてもそぐわない。「り」と「わ」は字源的にかなり類似しているので、その誤読あるいは誤写とみなし、他本により、「よわければ」に改める。和歌では、「糸」に関する原因・理由を表す場合、「玉の緒を片緒に繕りて緒を弱み(緒乎弱弥)

乱るる時に恋ひざらめやも」(万葉集・十二・三〇八二)、「あけたてばまづさすひものいとよわみたえてあはずはなどいけるかひ」(貫之集・六〇九)のように、音数律の関係からか、ミ語法が使用され、「よわければ」の用例は希少である。柳の枝葉が細く枝垂れるのを当歌のように「よわし」とする用例はほとんどない。三代集ころまででは、「春風になびくやなぎのいとよわみころほそくてたゆるきみかな」(元真集・二二二)、「えだよわみみだれやすなるあをやぎのいとたよりに風なよりこそ」(堀河中納言家歌合・一五)があるくらいである。

うぐひすとづる「とづる」を諸本の多くは「とむる」としてあり、その方が理解しやすい。しかし、以下の理由により底本のままとする。それは、鶯が柳と組み合わせられる場合、古今集以後の類歌では、「あをやぎをかたいたによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」(古今集・二十・大歌所御歌・一〇八一)、「青柳の花田のいとをよりあはせてたえずもなく鶯のこゑ」(拾遺集・一・春・三四・凡河内躬恒)などのように、柳の枝を糸と見立て、糸に関わる語で一首をまとめているからである。当歌の「とづ」は「糸」の縁から「綴づ」であつて、鶯を柳枝につなぎ止めることをいう。当歌の類例は歌集には検索し得ないが、宇津保物語に「青柳のいとまをしとて鶯のかりのたむけもとぢずやあるらむ」(宇津保物語・左大将(正頼)・五八八)がある。

ちからだになし「ちから」は柳の枝が鶯を綴じ入れる、つまり留める強さのことをいう。万葉集には、「岩戸割る手力もがも(手力毛欲得)手弱き女にしあればすべの知らなく」(万葉集・三・四一九・手持女王)、「このころの我が恋力(吾恋力)記し集め巧に申さば五位の冠」(万葉集・十六・三八五八)、「出で立たむ力をなみと(知加良乎奈美等)隠り居て君に恋ふるに心利もなし」(万葉集・十七・三九七二・大伴家持)などのように詠まれるが、古今集以降はほとんど用例がなくなり、院政期以降また詠まれるようになる。万葉集の用例のように、「ちから」は人間に関するものであり、当歌のように物について用いることはない。院政期以降も、人間に関する用例に、「つたはりてはるかに聞きし人づての法のちからのたとへなきかな」(田多民治集・一八五)のように仏法の効力が加わるくらいで、限定的な使用に限られる。そうした中で、「はなみるもくるしかりけりあをやぎのいとよりよわきおいのちからは」(頼輔集・一二三)が、人に関する力を詠みながらも、その比較に柳の糸を提示するのは注目される。副助詞「だに」は、他の木に比べて、柳の枝葉がいかに繊細なものかを強調している。

【補注】

当歌は、柳と鶯の組み合わせを、「糸」に関連のある語を使ってまとめるという点においては、類型による一首と言える。ただし、以下の点においては異例に属する。

一つは、鶯ではなく、柳を詠むのが中心という点である。これは、もちろん句題との対応関係に基づいているが、そうすることによって、和歌としての類型をふまえながらも独自性を出そうとしたのであろう。「みどりの糸」という比喩を用いるとともに、「とづ」や「ちから」などの語による擬人化は、その弱弱しさが女性的であることも暗示している。

『全釈』の「補説」では、「和歌において「とむ」は、花や鳥などに使われる場合、旅立つ人と送る人との関係を反映する。すなわち、この歌では「鶯が飛び去るのをとどめる力が柳の糸にはない」というのである。」と説く。「とづ」と「とむ」で本文は異なるが、擬人的な捉え方として共通するとすれば、当歌は男女の別れに擬せられているとも解釈できよう。

もう一つは、当歌では結句「ちからだになし」が一首の要となるが、この表現は決してマイナス評価ではなく、むしろそれゆえの、他に抜きん出た、柳の美しさを表しているということである。そもそも植物が歌に詠み込まれる場合、取り立てられるのはもっぱら花であり、その色や匂いであるのに対して、柳とくに枝垂れ柳の場合はその枝葉であり、「糸」の比喩どおり、その細くたおやかなさまである。「ちからだになし」という表現は、そのような美しさを、いわば裏側から表現したものである。

さらに、【語釈】で触れたように、「こづたひて」という初句の表現が不熟で、全体から浮いているという点である。接統助詞の「て」は本来、ニュートラルな並列・添加を示すが、前後の意味関係によっては、順接あるいは逆接に傾くことがある。当歌の場合、単純な並列とすると、柳が中心であるから、齟齬感を免れがたい。『全釈』の「木から木へと移って、緑の糸のような柳の枝は弱く、鶯をとめる力さえないのだ。」という通釈はそれを端的に示している。

全体の整合性に配慮すれば、ここの「て」は逆接的な結び付け方をしているとらざるをえない。つまり、鶯が木伝おうとするのに、である。とすれば、この場合の「こづたふ」は、同じ柳の枝から枝ではなく、柳から別の木へと移動するの意とするのが適切であろう。なお、当歌は、赤人集に「こづたへしみどりのいとものよりければうぐひすとむるちからなきかな」（一五）の本文で所載されているが、上句と下句が整合しない。

【比較対照】

原拠詩は、次に示す、白氏文集「楊柳枝詞八首」のうちの「又一首（其三）」（卷六十四・三一四〇）という七言絶句であり、句題はその結句である（同句は、千載佳句六〇八番にも採られる）。この一連の詩は、「折楊柳」と名付けられた楽曲に対する、白氏の新歌詞である。

依依嫋嫋復青青（依依いいでうごう、復またた青青）

勾引春風無限情（勾引す、春風、無限の情。）

白雪花繁空撲地（白雪、花繁くして空しく地を撲うつ。）

緑糸條弱不勝鶯（緑糸、條えだ弱くして鶯に勝たへず。）

当集の底本では、句題の「糸」を「竹」とするが、歌意にそぐわないので、原拠詩から「糸」に改めてある。

柳を取り上げるかぎりは、和歌の景物としては馴染まない、その花が詠まれている転句ではなく、鶯とともに枝葉が詠まれた結句が句題に選ばれるのは、順当なところであろう。

金子彦二郎『増補 平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究編』は、当歌を「原詩句を直訳せるもの」の一例として挙げる。確かに、句題における「緑糸」に和歌の「みどりの糸」、同様に「弱」に「よわし」、「鶯」に「うぐひす」、「不勝」に「ちからだになし」が、それぞれほぼそのまま対応していて、和歌で対応に欠けるのは、余剰とも言える「條」のみであるから、句題を中心とすれば、ほぼ全体に対応していると言えよう。

しかし、単なる言語量の差の問題だけではなく、和歌には句題そのものからは到底導き出せないような表現が付加されているのであって、その点では「直訳」たりえない。そのような付加の最たるものが、当歌初句の「こづたひて」である。

原拠詩結句では、鶯の動作にはまったく言及されず、実景であることさえも疑わしい。かりに想定すれば、どこからか飛んで来た鶯が柳の枝に止まろうとしたが、柳の枝はそれさえも支えられず、止まれないでいるという様子であろうか。結句の「弱」は、起句の「依依嫋嫋」を、鶯とのおよむような関係から言い換えたものであろう。

それに対して、当歌において「こづたひて」が付加されることにより、鶯の動作が明示されるのみならず、男女関係の別れに擬せら

れる場面設定が新たに浮かび上がることになったのである。もつとも、それに伴う表現上の無理も見られなくはないが…。

さらには、第四句の「とむる」か「とづる」かという異同はあるが、その付加が後者であるとすると、そのような場面設定に加え、「糸」との関係による表現構成にするという、和歌固有の工夫も認められるのである。

尋花不問春浅深（花を尋ねて春の深浅を問はず）

八 花をのみたづねこしまに春はまだふかさあささもしられざりけり

【通釈】

花だけを探し回ってきた間に（春は過ぎゆき、終わり頃になっても）まだ、春（という季節）については、深いのか浅いのかにも気が付かなかつたことだよ。

【語釈】

花をのみ「花をのみ」で一句を成す表現は万葉集には見られず、平安時代以降、「わかるともきみをしらねばけさまではちるはなをのみをしみけるかな」（躬恒集・一九七）、「花をのみあはれとやみるすてはつるふるさと人もなにならなくに」（斎宮女御集・二五六）など見られるようになる。当集の句題に「花（華）」という語は一六例あるが（一〇六番の「客（容力）華」は除く）、歌でもすべてそのまま「花」としてあり、何の花か特定しない。これは、必ずしもその花が自明であるからではなく、少なくとも句題の表現だけからでは特定しえず、千里もあえてそうしようとはしなかつたのであろう。本集の歌で具体的に花の名が示されるのは「はちす」（二八番）のみであり、これは句題に「蓮」とあるからである。当歌の場合、句題に「不問春浅深」とあるので、これを春の全時期ととれば、「花」は特定のものではなく、梅や桜などの代表的な花はあるにせよ、春に咲く花一般を指すと考えられる。

たづねこしまに「たづぬ」については三番歌【語釈】「ときをたづねて」の項を参照。「たづね＋く」に助動詞「き」を伴う用例は少

なく、三代集のころまででは、「身をうしと人しれぬ世を尋ねこし雲のやへ立つ山にやはあらぬ」(後撰集・十六・雑二・一一七三)、「たづねこしかたこそなけれしかすがのわたりはるけきうみをへだてて」(兼澄集・一一〇)、「山を出でてくらきみちにをたづねこし今一度の逢ふ事により」(和泉式部集・八八三。和泉式部日記では「たどり来し」)などがある程度。「たづね」は、本集に五首(三・八・七七・九五・一一六)あり、歌集の規模を考えれば、古今集の五首、後撰集の一七首、拾遺集の七首に比較して、極めて多いと言える。しかも、どの歌の句題にも「たづね」に相当する語が見られない(一一六番歌は句題無し)ので、あるいは千里歌に特徴的な語かもしれない。「ま(間)」は当集六番歌でも「はなをみしまに」という表現の中に出て来る。その動作中に経過した時間幅を表す。

春はまだ 「春は」という表現は、当歌全体の話題を提示し、その説明に相当するのが以下の結句までの表現である。この「春は」には、初句の「花をのみ」との対比も意識される。「春」と「花」は元来、対比関係ではなく、むしろ同伴関係にあるもの同士であるが、当歌においては、あえて対比関係にすることによって、結果的に「花」に対する執着・集中のほどを示そうとしたと考えられる。「まだ」は、「また」とも採ることができ、歌意全体からしても、どちらでも解釈できなくはない。ここでは、結句「しられざりけり」という否定表現との関係から、「まだ」の方を採っておく。

ふかさあささも 「ふかさあささ」は「ふかし」と「あさし」という対義の形容詞を名詞化して、しかも並列させるという、いかにも特殊な表現であり、これは句題の「深淺」という語との対応ということがなければ考えられまい。その程度の如何を表すのならば、「ふかさ」のほうだけで十分だからである。ただ、当歌をふまえたか否かは不明なもの、「ともかくもいひはなたれよ池水のふかさあささをたれかするべき」(拾遺集・十九・雑恋・一二三三)や「かはべにてくらさざりせばゆくあきのふかさあさをいかでしまし」(道命阿闍梨集・一三八)などの例が見られなくもない。前者の例は「池水」になぞらえた人の心に関してであるが、後者は当歌同様、季節に関しての例であり、「ふかさ」はその季節における遅い時期、「あささ」は早い時期を表す。これらの例には当歌とともに、「知る」という動詞が用いられていることにも注意される。つまり、「知る」内容は、深いことと浅いことという並列ではなく、深いか浅いかという択一であるということである。

しられざりけり 「しられ」の「れ」という助動詞は、第三句の「春は」という提題表現との関係で言えば、受け身とも可能とも採ることができ、一首全体のまとまりを人間側の視点から考えるならば、可能の意であろう。人間側というのは、上句の「花をのみた

「ずねこし」の主体としての人間が「しられざりけり」という関係である。歌末の「けり」については、当集二番歌【語釈】「我はきける」の項および【補注】を参照。当歌では、春という季節の進み具合を認識する余裕がなかったことに、今さら気づき詠嘆することを表す。結果として、その時点では、もう春も終わりの段階を迎えていたということになる。

【補注】

季節の推移を実際に感じ取るのは、自然物や自然現象の変化によってである。「暦の上で」という言い方もあるが、それはむしろ実感とは乖離するからであって、季節は、見聞きしたり肌で感じたりする自然のありようによって、それと知られるのである。古代和歌の季節歌はそのように詠まれていたのであり、その中には、もちろん花も含まれる。何かの花が咲き散ることを、季節の移り具合と重ね合わせるような表現が行なわれた。つまり、両者は切っても切れない関係なのである。

ところが、当歌はそのような季節と自然物との関係を切り離すという、意表を突く詠みを試みたのである。それは句題からさえも離れたものである。

「花をのみ」という初句は、同時期の他の風物との対比を予想させるが、【語釈】にも述べたように、第三句の「春は」によって、じつは「花」と「春」という意外な対比であることが判明する。花だけに関心をもって探して来たので、その間は春の進み具合にまったく気付かなかったというのである。花のありようを見れば春の推移が分かるのは当然であるにもかかわらず、それに思いが及ばないほどに、花に専心していたことになる。

そして、春の花々が見られなくなる頃になって、ようやく春の終りに気付いたわけである。それがまさに結句の「しられざりけり」であり、第二句の「たずねこし」の「来」という動詞の示す到着点からの視点とも呼応している。

当歌をこのように捉えたとき、上二句と下三句はそのままでは内容的につながりにくい。「花をのみたづねこしまに」に続くべきは、その間に何をしたか、何があったかであり、それは、春が過ぎつつあったという事実である。この事実をふまえてこそ、そのことに気付かぬままに春の終りを迎えてしまったことへの感慨が詠まれるのである。このような着想・設定は、六番歌と酷似している。

【比較対照】

原抛詩は、白氏文集ではなく、次の、全唐詩の「同友人見花」（卷五百十四・朱慶余）と題する七言絶句であり、当句題はその起句

から採られたとされる（陳茵「大江千里集」の句題原拠不明歌について）『愛知淑徳大学国語国文』第一八号、一九九五年による。

尋花不問春深淺（花を尋ねて春の深淺を問はず。）

縦是残紅也入詩（縦たゞひ是れ残紅また詩に入らば。）

每箇樹辺行一匝（毎おほに箇の樹辺に行きて一と匝おほり。）

誰家園裏最多時（誰が家の園裏か最時多き。）

句題中の「不問」は、質問しないの意ではなく、関係しないの意である。したがって、句題の「不問春深淺」は、春の中の、どの時期であっても関係ないということを表す。『全釈』が、「どこに花が咲いたか美しい花を求め歩いていると、春の季節のはじめなのか終りの方なのか問題ではなかった。」という通釈の「問題ではなかった」というのは、まさにこの「不問」の意を生かしたものである。

この「不問」に対して、歌で対応しそうなのが結句の「しられざりけり」である。この両表現は、時期を「不問」つまり関係ないものとして、問題にしなかったことの結果、「しられざりけり」というふうに関果的に結び付けることもできようが、それぞれの表現全体および当該表現の位置付けからして、重きがまったく異なる。

句題を含む詩全体からは、「尋花」という行為がこれからであると推察されるのに対して、当歌は「たづねこし」の「し」という過去の助動詞に明らかのように、すでに行われたことである。また、当歌には「花をのみ」のように、花に限定されるのに対して、句題のほうは、詩全体が花樹について表現されているものの、そのような限定はなく、まして「春」との対比も認められない。

これらをふまえれば、句題はあくまでも一般論として述べているのに対して、当歌は実際の体験に基づく感慨として歌っている、という大きな違いがある。

さらに、句題の「春深淺」は「春の深淺」というつながりが自然であって、「春」という季節を取り立てる必要は認められない。句題との対応を考えれば、当歌においても「春のふかさあささ」という表現もありえたはずである。にもかかわらず、なぜあえて「春は」という提題表現に変えたのか。それは、初句の「花をのみ」という限定との関係からである。

もとより、原拠詩において、「花」と「春」とを対比する意図はまったく見出せない。その起句を句題に選んだとき、千里が目論んだのは、「花」は「尋」、「春」は「不問」という表現をきっかけとして、それをもっと積極的に対比関係として詠んでみることはなかつ

たか。【補注】で述べたように、それは十分に意表を突く趣向であった。その成否のほどは措くとしても。

夜風吹送毎年春（夜風吹き送る、毎年の春）

九 はかなくてそらなる風のとしをへて春ふきおくることぞあやしき

【通釈】

とらえどころなく（あつけなく）、うつろである（上空にある）（にもかかわらず、そういう）風が吹いて何年も春を送り込むということが不思議だ。

【語釈】

はかなくて 次が続く「そらなる」とともに「風」を修飾する。「はかなし」と「風」がともに詠まれる用例は、「秋風にかきなすこととのこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ」（古今集・十二・恋二・五八六・壬生忠岑）、「もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり」（古今集・十六・哀傷・八五九・大江千里）、「かぜのまにちるあはゆきのはかなくてところどころにふるぞわびしき」（清少納言集・三五）などのように、古今集から見られるが、どちらも風の状態そのものを「はかなし」というのではない。当歌の類例としては、「もみぢばのはかなき風にちらざれば秋はすぐともしられざらまし」（陽成院歌合・二二六）がある程度。風を「はかなし」というのは、実体として知覚できないものと捉えたことによる。この点については、【補注】を参照。

そらなる風の 「そらなる」という表現には、名詞「そら」に助動詞「なり」が接続し「空にある」の意と、形容動詞「そらなり」（空虚、心がうつろ）の連体形が掛けられることが多い。古今集以降、「ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがる山の風はやみなり」（古今集・十五・恋五・七八五・在原業平）、「秋風のうちふきそむるゆふぐれはそらに心ぞわびしかりける」（後撰集・五・秋上・二二二）などのように、「風」と「空（なり）」が共に詠まれる用例はある。しかし、「風」そのものを「空（なり）」とするものは稀少で、「心

あだにおもひさだめずふく風のおほぞら物ときくはまことか（平中物語・九段・三七）や「きくやいかにうはのそらなる風だにもまつにおとするならひありとは」（新古今集・十三・恋三・一一九・宮内卿）が見られるくらいである。ただ、「夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ」（古今集・三・夏・一六八・凡河内躬恒）のように、実際に上空を吹く風という想定は詠まれている。当歌の場合の「そらなる」は、風に関して、上空の意と、初句の「はかなくて」との関わりから、うつろの意との両方が生きていると考えられる。「空」は「風」の縁語。当集には、古今集の修辭に特徴的な掛詞・縁語がほとんど見られないが、ここでは珍しく掛詞・縁語が使用されている。ちなみに、当集に「風」は一三首、全体のおよそ一〇%の歌に見られ、万葉集の四%余り、三代集の五〜七%（「風」の項、稲田利徳執筆、久保田淳・馬場あき子編『歌枕大辞典』角川書店、一九九九年による）と比べると、多いと言える。

としをへて「としをへて」は長い年月を過ぎて、の意。風が「としをへて」吹くという詠まれ方は、平安後期になって「としをへてくるはるかぜはみだれどもよりかけてけりあをやぎのいと」（忠盛集・八）が見られる程度である。「としをへて」は句題の「毎年」に相当しようが、「毎年」は規則性に焦点があるのに対して、「としをへて」は連続性に焦点があり、異なる。「毎年」にそのまま対応するのは、「としごと」であり、音数律的にも問題なかったはずであるが、「としをへて」のほうを選んだのは、規則性よりも連続性つまり時間の長さに関係を置いたからであろう。それは、風に関して、命の短さというイメージを伴う「はかなし」という語を用いていることとの対比が意識されたからであろうし、それゆえに、結句の「あやし」という評価を導きやすいと判断したからと考えられる。春ふきおくる「ふきおくる」は、風などが吹いて物を送る、の意。おそらくは句題にある漢語「吹送」を訓読したものである。当歌では、新年に風が吹いて春を送り込むという意と見られる。春と風の関係は、周知のように、礼記の月令篇「孟春之月……東風解氷」により、立春の風が氷を溶かすものと詠まれるのが一般で、当歌のように春を吹き送るものとして詠まれた例は、他に見つけることが難しく、「春ふきおくる」という七音句も他に検索し得ない。「ふきおくる」という句も、平安時代後期から見え始め、「ふきおくるをのへのかぜやよわからむすええはきえぬるしかの声かな」（親盛集・四四）、「あけぬとて野べより山にいる鹿のあと吹きおくる萩の下かぜ」（新古今集・四・秋上・三五・源通光）などの例がある。

ことぞあやしき「こと」は初句から第四句までのすべてを受け、名詞句としてまとめ、係助詞「ぞ」がそれを強調する。そこで示さ

れた矛盾について、詠み手は「あやし」と評価するところに、当歌の中心がある。「あやし」は通常とは異なることに對する驚きを表す語であり、それがプラスの場合は、魅力的の意となり、マイナスの場合は、不審・異常・下賤の意に傾く。当歌の「あやし」は、矛盾として想定すること自体を面白がっていると採らなければ、歌として成り立ちようがない。「ことぞあやしき」という七音句は、「あらたまのとしはすぐれどありあけの月のかはらぬことぞあやしき」（道命阿闍梨集・三〇〇）など当歌を含めて五例検索でき、すべてが結句に位置し、平安時代の用例である。なお、【補注】参照。

【補注】

風が、春と秋の季節の到来を告げる役割を果たすものとして詠まれることは、古代和歌における常識である。事実、「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」（古今集・一・春歌上・二・紀貫之）を挙げるまでもなく、歌集の春歌と秋歌の冒頭部には、風が詠み込まれている。ここでは、風は風であって、それがどのようなものであるか、なぜ季節を知らせるのかなどについての詮索がされることはない。

ところが、当歌は「はかなくてそらなる」という性質の風が、なぜ「としをへて春ふきおくる」のかのように、それを詮索し、矛盾として提示しているのである。そこで問題になることが二つある。一つは、風が「はかなくてそらなる」のは春限定なのか、それとも季節を問わず一般的にそうなのかということ、もう一つは、「はかなくてそらなる」ものならば、「としをへて春ふくおくる」ことは不可能なのかということ、である。

一つめについては、風つまり空気の流れ自体は知覚しがたいものであり、まして「そらなる」風ならば、季節を問わず「はかなし」となる。ただし、原拠詩のように「狂風」レベルならば、話は別である。二つめについては、季節の到来は知覚可能な自然の変化によって確認されるものであるから、それができない風では不可能ということになる。もっとも、「あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（古今集・四・秋歌上・一六九・藤原敏行）のように、秋の到来を「風のおと」という聴覚刺激によって感じ取る場合もあるが、その「おと」は、風によって事物の発する音であって、厳密には風そのものではない。

当歌と同じく、相矛盾する二つの事柄を取り上げ、その関係の成り立ちについて「あやし」と評価するという組み立ての歌は、万葉集から見られる。「あらたまの五年経れど我が恋ふる跡なき恋の止まなくも怪し（不止惟怪）」（万葉集・十一・二三八五）、「住吉の敷

津の浦のなりのその名は告りてしを逢はなくも怪し（不相毛怪）（万葉集・十二・三〇七六）などのように、「止まなく」「逢はなく」といったク語法で名詞化され、それが係助詞「も」で提示されている。当歌では「こと」で名詞化し、「ぞ」が下接するという違いはあるが、こうした万葉集の表現パターンを当歌は引き継いでいると見てよい。古今集以降も、「たまかづらむすびもしらぬ物ならばこのいできけむことぞあやしき」（伊勢集・二〇〇）、「かげくれてひかりなきをもころもぬふいとをもよるといふぞあやしき」（忠岑集・一三一）、「うゑて見る君だにしらぬ花の名を我しもつけん事のあやしき」（拾遺集・七・物名・三六一）などのように、「（ことぞ）あやしき」をはじめとして、「あやしかりけり」「あやしき」といった歌末形式が類型として現れる。

【比較対照】

当歌句題の原拠詩は、元氏長慶集の「杏園」（巻十六）という題の七言絶句であり、その承句が句題に採られた。

浩浩長安車馬塵（浩浩たる長安、車馬の塵。）

狂風吹送毎年春（狂風吹き送る、毎年の春。）

門前本是虚空界（門前本より是れ、虚空界。）

何事栽花誤世人（何事ぞ、花を栽ゑ世人を誤るは。）

詩題にある「杏園」とは、長安の東南の景勝地、曲江池の西のほりにあつた庭園のこと、例年、そこで科擧の合格者のために天子が宴会を催した。この詩には科擧批判も意図されているようだが、当歌にはそうした政治的要素は認められない。

原拠詩承句には「狂風」とあり、本集他本にもその本文があるが、底本は「夜風」とする。字形として誤写の可能性がまったくないとは言えないものの、意図的に改変したのではないかと見られる。

その理由は二つある。一つは、「狂風」に相当する語が和歌とりわけ春歌には馴染まなかつたこと、もう一つは、「夜風」とすることによって、当歌の雰囲気を表すのにふさわしかつたことである。もつとも、「よかぜ」という、「夜風」の訓読語をそのまま用いようと思えばできたにもかかわらず、歌に用いることはなく、「はかなくてそらなる風」のように表現した。これは「狂風」にはまったくそぐわない。この表現が「夜風」に相当するのは、昼ではなく、周囲の様子が見えない夜だからこそ、風が「はかなくてそらなる」なのである。

いずれにせよ、風に関して、句題の「吹送毎年春」と、当歌の「としをへて春ふきおくる」はほぼ対応するが、文脈的には大きく異なる。原拠詩においては、その後半に明らかのように、この世を「虚空界」と見れば、季節の変化も花の移ろいもまやかしにすぎないことを歌い、承句はその事実を示すだけであるのに対して、当歌においては、【補注】に詳説したごとく、歌の常識としてあった、自然界における風と季節の変化との関係を、句題にはない「あやし」という語によってあらためて捉え直すところに眼目がある。

ただし、「はかなくてそらなる」という表現にしたのは、あるいは原拠詩転句の「虚空」を写そうとしたのかもしれない。漢語「虚空」を訓読したとおぼしき「むなしきそら」という表現が、古今集以降いくつも見られることが思い合わされるからである。とすれば、当歌においては、幻像の風と現像の春との関係を「あやし」と評したとも見ることができよう。

どちらにせよ、このような改変は春歌という位置付けのためであり、千里歌としての独自性をアピールするためでもあった。読み手にもまたこの原拠詩が知られていたとすれば、その意外性はいかばかりであったかと思われる。たとえば、結句を句題として、花の移ろいを予想する歌を作ることにも十分に可能だったはずであり、その方がまだ句題および原拠詩とのつながりが認められよう。『新撰万葉集』にも、「花の樹は今ほ掘りうゑじ春立てば移ろふ色に人習ひけり」（新撰万葉集・春・七）という例があるように。

春暖山華処々開（春暖かくして山の華処々に開く）

一〇 あたたけき春の山辺の花のみどころもわかずさきみだれける

【通釈】

暖かな春の山辺の花だけが、（心を他に移すこともなく）ひたむきに咲き乱れることだよ。

【語釈】

あたたけき 暖かい、暖かそうだ、の意。次句の「山辺」を修飾する。当歌の他に、万葉集に「しらぬひ筑紫の綿は身に付けていまだ

は着ねど暖く見ゆ(暖所見)〔万葉集・三・三三六・沙弥満誓〕が検索されるのみ。「あたたけし」「あたたかし」「あたたかなり」は、和歌にはほとんど使用されなかつたようである。ただし、漢詩には「暖」字は多く見られ、たとえば和漢朗詠集には五例ある。「露暖南枝花始開」(春・梅・九二・菅原文時)、「沙暖鴛鴦敷翅眠」(水付漁夫・五一・白居易)。当歌も、句題の「暖」をそのまま使用したものである。

春の山辺の「山辺」は山の辺り、山に近いところのこと。季節を春に特定した例として、万葉集には、「……久邇の都は、うちなびく春さりぬれば(春去奴礼婆) 山辺には(山辺尔波) 花咲きををり……」(万葉集・三・四七五・大伴家持)のように見られ、古今集前後になると、新撰万葉集に三首(二九・三一・五九。五九は「夏」の誤写か)、古今集には、「あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける」(古今集・二・春下・一一六・紀貫之)など、五首見られ、この頃に「春の山辺」が定着した表現になったことがわかる。当集にはこの用例のみであるが、当歌もそうした流れの中で詠まれたものであり、そのほとんどが第二句に詠まれる。花のみぞ 万葉集に、「花のみ」を含む句は「はしけやし我家の毛桃けも本繁み花のみ咲きて(花耳開而) 成らざらめやも」(万葉集・七・一三五八)、「賄ましつつ君が生ほせるなでしこが花のみ問はむ(波奈乃未等波無 君ならなくに)」(万葉集・二十・四四四七・橘諸兄)など、八例見られるが、八代集では金葉集にしか用例が見られない。ただ、私家集には、「あだなれと我にはきくの花のみぞうつろふいろのこさまさりける」(躬恒集・一三三三)、「をる人もなきやまざとにはなのみぞむかしの春をわすれざりける」(斎宮女御集・二五二)など、用例が散見される。万葉集では、挙例の一三五八番歌のように、「花のみ」の後「さきて」と続く用例が五首あり、そのすべてが「(実が)ならず」との語句を伴う、恋の歌であるが、当歌を含め、平安時代には、そうした類型的な傾向は見られない。また当歌は、「山辺の花のみぞ」が「さきみだれける」にかかるもの、「さき(て)」が連続するわけでもなく、その他の点においても万葉集の類型性は見られない。当集八番歌には「花をのみ」という、助詞「を」を挟む表現がある。その【語釈】該項も参照。なお、『全釈』では、この「花」を桜の花と特定している。「山辺」という場所柄を考えれば、その蓋然性は高いとはいえず、「花のみぞ」および後出の「さきみだれける」の類例を見るかぎりには、断定しかねる。当集に「のみ」は一五例、全歌数の一〇%強も見られる。古今集の七四例(六・七%)より多い。新撰万葉集との表現の比較において、当集が表現の限定・強調の傾向があり、その一つに「のみ」がある(半沢幹一「大江千里『句題和歌』における和歌」(日本文芸研究会編『伝統と変容』ベリカン社、二〇〇〇年、所収)参照)。これは、古今集と

の比較においても言いうる。

「ころもわかず」「ころ」は、文脈的には「花」の心となり、花を擬人化している。「ころもわかず」は、心に分ける、つまり心を他に移すこともなく、の意で、「さきみだれける」を修飾する。「ころ + (助詞) + わかず」の用例は少なく、「ゆきかよひはなにころはわかぬともはるのかすみはなほへだてけり」(兼澄集・二)、「宮城野の小萩がもとと知らませばつゆもころをわかずぞあらまし」(源氏物語・東屋・七二六)などが見られるくらいである。

「さきみだれける」底本は、「たる」の「た」を見せ消ちとし「け」を傍書する。「さきみだる」は、花が入り乱れるように咲くという意。平安時代の和歌では、「みわたせばかすがののべにかすみたちさきみだれたるさくらばなかも」(家持集・三一)、「おほかたの秋ならねどもわがやどにさきみだれたる花とこそみれ」(高遠集・一七二)などのように、その多くは「けり」ではなく「たり」が下接し、連体修飾表現となる。「けり」を下接する用例は少なく、「あをやぎのいとよりかくる春のはいろいろ花ぞさきみだれける」(千穎集・五)、「秋くればいとよりかくる萩のえはむらごに花ぞさきみだれける」(播磨守兼房朝臣歌合・九)が見られる程度で、当歌と同じく結句に置かれる。この二首は、「糸」の縁語として「さきみだる」が用いられ、「さきみだる」の「みだる」は、その「糸」という見立の「あをやぎ」や「萩のえ」のせいだとする詠みになっている。その点、「糸」が詠み込まれずに「さきみだる」が用いられる当歌とは異なる。

【補注】

当歌は、「春の色のいたりいたらぬさとはあらしさけるさかざる花の見ゆらむ」(古今集・二・春下・九三)という、春の到来はどこでも変わらないはずなのに、開花が同時ではないことを訝しむ歌に対する答歌にもなりそうな詠みぶりである。

当歌の眼目は、歌末の「ける」の示す発見が、上句の「あたたけき春の山辺の花のみぞ」の「あたたけき春の山辺」だからこそというところにある。その山辺とは、同じく山辺であっても、ひとときわ日当たりの良いところなのであろう。裏を返せば、「山辺」以外の場所、さらには「あたたけき春の山辺」以外の場所では、花がまだ咲いていない、あるいは咲き始めであることを示唆している。

なぜ、ここだけこんなに花が咲いているのかという、自然のありように対する素朴な疑問を、機知的な趣向として歌に仕立てるのは、いかにも古今的な歌風であると言えよう。

なお、赤人集には、「あたらしきはるの山べのはなのみぞとこもわかずさきにちりける」（一八）という、当歌と類似する歌がある。「あたらしきはる」は「新春」という漢語の訓読を思わせるが、語句の「さきにちりける」と整合しない。

【比較対照】

原抛詩は不明であるが、句題の表現内容からして、詩の前半部に位置すると推測され、春歌として取り上げやすい景物が取り上げられていることから、句題に採られたのであろう。

実際、句題と歌の表現上の対応関係を見ると、句題の「春暖」と歌の「あたたけき春」、同じく「山華」に「山辺の花」、「開」に「さきみだれける」のように、「処々」以外は、ほぼ対応している。

句題の「処々」に対しては、別本の「ところもわかず」のほうが、意味的にはより似つかわしい。「ところもわかず」は、場所の区別なく、つまり至るところで、の意を表すからである。また、「と」と「こ」は崩し字の字形がよく似ているので、あるいは誤写の可能性もなくはない。しかし、あえて句題との距離がある「ところもわかず」のほうが、歌独自の創作意図が認められる。

すなわち、句題は春の情景を描写しただけのものであり、それをそのまま日本語に写しても歌としては成り立ちえないのであって、当歌において付加された「ぞ」と歌末の「ける」の係り結び、「花のみ」の「のみ」による限定という表現とともに、「ところもわかず」という措辞によって、歌としての抒情なり趣向なりが示されているのである。

「ところもわかず」という表現が、「山辺の花」を擬人化するとしたら、その擬人化は「さきみだれける」の「みだれ」という、句題に付加された表現にも及ぶのは自然なことであり、むしろ擬人化を維持するために、「さきみだる」という表現が選ばれたとも考えられる。そこには、「あたたけき春の山辺」にあつては、人間だけではなく、「花」も喜んで、ひたむきに咲き乱れているのだらうという、和歌らしい、自然に対する感情移入が認められるのである。

【付記】

本論における小池担当分に関しては、JSPS 科研費16K02390（基盤研究C）による研究成果が反映されている。